

な蔑称となっていたのである。幕末文久三年〔1863〕に生を受け、長ずるに従って東北の苦難を身をもって知った一力健次郎によれば、西南の閩族官僚は東北を「第二の蝦夷民族」の地位におとしめるものである。この屈辱をはね返し、河北の地を政治的、経済的、文化的に自立・発展させ、河北の復権を図らなくてはならない—そうした抵抗と奮起の精神が「河北」の二字に凝縮されているのである。……

一力健次郎が、「河北」の言葉を重用したのは、単なる地理的範囲を指すものでなく、「一山百文」決起の歴史的寓意を含めたものである。しかも、健次郎はその後、河北の営業区域を利根川以北の北部日本に拡大し、これに北海道を含める積極策に出た。』とある。

「河北新報」の題号の「河北」の出典となった頼山陽の漢詩には、次の二つがある。

1. 文政年間〔1818～1829〕作、「多賀城瓦研歌」〔39句につき前後略〕

『河北終帰獨眼龍』

2. 天保元年〔1830〕作

『横槩英風獨此公 肉生脾裏斂軍鋒

中原若未収雲雨 河北渾帰獨眼龍』

獨眼龍とは中国唐の隻眼の英雄李克用〔856～908〕。頼山陽はこれらの詩中で、わが国の伊達政宗を李克用に擬した。李克用についてはP. 331の注(5)参照。

資料 近事評論 148号（共同社）

92. 「きびちょ」は仙台方言か

問 「きびちょ」は、仙台の方言か。

答 「きびちょ」の原語は、中国語の「急焼」〔jishao〕の福建音であるとされています。これが、江戸時代わが国に入ってきた外来語の一つで、本来の用途とは異なる煎茶器として使われてきたものであります。「大言海」（大槻文彦）に『〔急焼ノ支那福建音ナリト云フ〕きふす（急須）ニ同ジ』、⁽¹⁾「仙台方言考」（真山青果）に『○きびちょ きふす 煎茶器の急須をいふ。キビショの訛れるなり。⁽²⁾芸苑日渉に「今人呼小茶瓶急須焼、即急須也。須音蘇、国音呼急蘇、猶云急備焼、蓋唐音之転訛耳』とあります。これを「きびしょ」、「きびしょう」と呼ぶ地方もあります。所詮、「きびちょ」は、外来語の一つであって、「きびしょ」といい、「きびしょう」といい、「きびちょ」といったところで、そのどれもが原音を正確に表現しているものといえません。「きびしょ」や「きびしょう」が標準語で、「きびちょ」が仙台方言であるときめつける根拠はありません。外来語の日本音はもともと

訛といえは訛であって、「インキ」と「インク」とか、「ダイヤ」と「ダイア」とかのいずれか一方が標準語で、他方が方言であると判別することが無理であるのと同然であります。

「仙台方言辞典」（浅野建二）には、『キビチョ^{きびしよ}（急須）江戸語。「近世上方語辞典」（前田 勇）きびしよ（急焼）（シナ福建音キヒシヤオの訛という）きゅうす。宝暦頃から用いられるようになった。明和七年・風流茶人氣質「石の竈^{五ノ}をつきて、新なるきびしよをかけ」。

「江戸語大辞典」（前田 勇）きびしよ（急須）＜略＞急須。短呼して「きびしよ」とも。安永七年・南江駅話「茶をちっといれやんしよと、こんろにきびしよ」文久二年・春色春廻染分解^{四上}「鍋島焼^{きびしよ}の急須」「仙台方言考」（真山青果）きびちよ煎茶器の急須をいふ〔下略〕。「方言学概論」（橋 正一）〔キビチョ^{キビシヨ}急焼の支那の福建音なりと「大言海」にある。これを方言^〇扱^〇ひ^〇に^〇す^〇るは不当である。東京市を始めとして、一道三府三十七県に分布してゐる。無いところを挙げた方が早い。群馬・滋賀・鳥取・広島・愛媛・高知の六県だけは急須のキビシヨがあると云ふ報告に接しない。土佐幡多郡にはキビシヨはあるが、それは爛徳利の事である。広島県豊田郡でも同様であるらしい。元来、支那では急焼といふのは酒を煖める器である。三余賢筆に「呉人酒を煖むる器をよんで急須となす」とある。してみれば爛徳利の方が却って原義を伝えてゐるかも知れない。「全国方言辞典」（東条 操）きびしよ①急須。殆ど全国。きびちよ仙台（方言考）②酒のかんをする土瓶。和歌山。③醤油入れに使う急須。愛媛県大三島鹿角「きびちよ キビシヨ（急焼）ノ訛 急須。煎茶器。此ノ語ハ福建語ノ急焼キブシヤオヨリ来レリト云フ。彼土ニテハ急焼モ急須モ酒ヲ温ムルニ使用ス（焼字ハ温ムルノ意ニ使用セラル）之ヲ用キレバ直グお爛ガツク意味ノ語ニテ、茶器ニハフサハシカラヌ名ナリ」。広島「キビシヨ（急須）この語の分布も殆ど全国的である。キビシヨはキウスと共に＜急焼＞の唐音から転じた語で、禅門から広まったらしい。急焼は字のごとく早焼きにした簡便陶器のことで、最初に移入されたのが急須型の油注ぎであったという。全国では酒の爛立て土瓶か醤油差し、油注ぎに限ってこの名で呼ぶ所も少なくない」。大阪「キビシヨ（名）陶器の茶わかし。キフス〔急須〕の音が転じたものか。』とあります。また、「仙台方言」（藤原 勉。「仙台市史」第6巻の内）に、『キビチョ^{きびしよ} 急須〔下略〕』。「方言」（藤原 勉。「宮城県史」20の内）に、『きびちよ 急須の転』。「自伝的仙台弁」（石川鈴子）に、『きびちよ 急須。「きび」は独得の鼻音となる』。「岩手方言集」（小松代融一）に『（旧南部領）キビチョ キビチョー 急須。（旧仙台領）キビチョ キピチョ キビチョー キビッチョ 急須』。「福島県方言辞典（児玉卯一郎）に『キビシヨ キビチョ キビキョ 急須』などとあります。かりに「きびちよ」が方言として扱われるとしても、この語が外来語であるという由緒からしても、その使用範囲からしても、狭く仙台限りの方言であるということはありません。

注(1) P. 110 の注(4)参照。

注(2) 昭和 11 年 9 月、刀江書院発行。「真山青果全集」第 15 巻に収録。著者の真山青果は仙台生れの作家、劇作家。明治 40 年、自然主義文学の風潮の中で「南小泉村」を発表して注目され、

新派の座付き作家として60編余の戯曲を書いた。方言については、大正3年「随筆」に「仙台方言と川柳」を書き、翌年8月以降「仙台方言考」と題して「宮城県人」に4回連載した。それがこの書のもとになった。項目数946。この書の特色は、西鶴研究の余業ともいえるべきで、その他の古典を博搜している点である。その結果、今仙台方言といわれるものに、各時代語〔中央標準語〕に由来する語の多いことを明示している。その中でも、仙台方言と近世語との関連に最も意を注ぎ、旧説を正すものも多く、優れた学問的業績となっている。

注(3) P. 112の注(1)参照。

資料 大言海（大槻文彦）

仙台方言辞典（浅野建二）

仙台方言考（真山青果）

93. 「仙台石」とは

問 石碑などの石材が「仙台石」と書いてあるのをよく見受けます。「仙台石」とは、どのような石をいうのですか。

答 「仙台石」とは、石巻市稲井から産出される泥板岩で、稲井石また井内石ともいい、碑石材、石塔材等に最適で、昔から広い販路をもっているものです。この稲井石を他所では「仙台石」と称せられるようになったものです。この場合の「仙台」は、旧仙台領全体の汎称であります。例えば、「奥州[○]仙台[○]斎川の名産孫太郎虫⁽³⁾」など、古くから全国的に名の通ったものも、「仙台」の汎称の効用の一つであります。

「牡鹿郡案内誌」（高橋鉄牛）に、「仙台石」について次の記事があります。

『井内の石材

東京に於て[○]仙台[○]石と称する碑石は、本村〔稲井村。現石巻市内〕の特産物なるが、特に井内の一部落より此良材を出すのみならず、上品山^{じょうほんざん}の中腹たる大瓜及び牧山の岡陵一帯の地は、全山悉く泥盤岩にして無尽蔵の石材を出し、〔中略〕井内の石山は、石巻停車場の東方にありて、車道三十町、井内郵便局、稲井村役場、巡查駐在所等共に此所にあり、近時大に石材の声価を高め北は北海道、南は関東関西及北越地方に販路を拡張し、百余戸の部落、老幼其業に従事す。実に天与の一大富源なりとす。〔中略〕

牡鹿郡の地、山岳岡陵は、森林繁茂して、地上より木材・薪炭を出すのみならず、地下より金銀鉱及び黒鉛を出し、而して到る所、泥盤岩（井内石）と玄昌石（石盤石）とを出す。全国各府県に於